

古今著聞集(小式部内侍が大江山の歌の事)

解答する際は、裏面の現代語訳を参考にすること。また、語句の意味は辞書やインターネットを、活用は図説等を使用し、可能な限り記入すること。

次の登校日にこの用紙を印刷したものに解答を記入して提出する。

それができない場合は、A4版のレポート用紙に課題の出題日、学年・出席番号・

氏名を記入し、問ごとの解答を記入して、**裏面の解答用紙例の様式で提出すること。**

語句・文法

問一 次の語の意味を調べよ。

- 1 下る 〔 〕
- 2 局 〔 〕
- 3 直衣 〔 〕
- 4 あさまし 〔 〕
- 5 返し 〔 〕
- 6 世おぼえ 〔 〕

問二 次の太字の動詞の活用の種類と活用形を、あとのア～コからそれぞれ選べ。

- 1 歌合**あり**けるに、 〔 〕
- 2 丹後へ**つかは**しける人は 〔 〕
- 3 **過ぎ**られるを、 〔 〕
- 4 なかば**出**でて、 〔 〕
- 5 まだふみも**み**ず 〔 〕
- 6 世おぼえ**出**で**来**にけり。 〔 〕

- ア 上一段活用 イ 上二段活用
- ウ 下一段活用 エ 下二段活用
- オ 四段活用 カ カ行変格活用
- キ ラ行変格活用
- ク 未然形 ケ 連用形 コ 終止形

問三 次の太字の助動詞の意味は、あとのア〜エのいずれにあたるか。それぞれ選べ。

- 1 歌よみにとられて 「**レ**」  
2 局の前を過ぎられけるを、 「**レ**」  
3 ひきはなちて逃げられにけり。 「**レ**」  
ア 受身    イ 尊敬    ウ 自発    エ 可能

**要点の整理**

● 次の空欄に適語を入れて、内容を整理せよ。

第一段落(起) 初め〜一〇・二

小式部内侍歌合に選ばれる

和泉式部が保昌の<sup>ア</sup>「**レ**」として<sup>イ</sup>「**レ**」に下ったときに、京で<sup>ウ</sup>「**レ**」があつたが、娘の小式部内侍が、<sup>エ</sup>「**レ**」によみ手として選ばれてよむことになつた。

第二段落(承) 一〇・二〜一〇・四

定頼のからかい

定頼の中納言が、からかつて<sup>オ</sup>「**レ**」に、「**カ**」**レ**へおやりになつた  
キ「**レ**」は戻つて参りましたか。」と、**ク**「**レ**」の中へ声をかけて、**ケ**「**レ**」を通り過ぎなさつた。

第三段落(転) 一〇・四〜一〇・七

あつと言わせた小式部内侍の返歌

すると、小式部内侍は、**コ**「**レ**」から半分身を乗り出して、定頼の<sup>サ</sup>「**レ**」の袖をとらえて、「大江山」の歌をよみかけ、「**シ**」**レ**のいる丹後は遠いので、まだ<sup>ス</sup>「**レ**」**「もございません。」**と答えた。

第四段落(結) 一〇・七〜一〇・八

定頼の狼狽

思いがけないことで、**セ**「**レ**」**レ**をすることもできず、定頼は<sup>ツ</sup>「**レ**」**レ**をふりきつて逃げた。

後日談

これ以後、小式部内侍のタ「 」としての世のチ「 」が立ったそうだ。

○現代語訳

和泉式部が、「藤原」保昌の妻として丹後の国に下ったときに、京で歌合があったが、（その娘）小式部内侍が、歌合のよみ手として選ばれてよむことになったが、「藤原」定頼の中納言が、からかって小式部内侍に、「丹後へおやりになったという使いは戻って参っているか（母上の和泉式部の助けがなくてお困りでしょう）」と（小式部内侍の私室に）声をかけて、部屋の前を通り過ぎなされたところ、小式部内侍は、御簾から半分ほど出て、（定頼の着ている）直衣の袖を引き止めて、

大江山……大江山、生野という所を通って行く、丹後への道が遠いので、まだ天橋立を訪れたことはございません。そのように、母のいる丹後は遠いので、まだ便りもございません。

と（定頼に歌を）よみかけた。（定頼は）思いがけないことであきれて、「これはどういうこと。」とだけ言つて、（当然の作法である）返歌することもできず、（引き止められた）袖を振りきってお逃げになってしまった。小式部は、このことにより歌人としての世の評判が出て来たそうだ。

解答用紙様式 A4版レポート用紙にまとめる。2枚以上になる場合はホチキスでとじる  
こと。

五月七日課題 三年古典A①

三年組 番号氏名 ( )

問一

- |   |   |
|---|---|
| 1 | ○ |
| 2 | ○ |
| 3 | ○ |
| 4 | ○ |
| 5 | ○ |
| 6 | ○ |

問二

- |   |   |
|---|---|
| 1 | ア |
| 2 | ウ |
| 3 | イ |
| 4 | エ |
| 5 | オ |
| 6 | カ |

問三

- |   |
|---|
| 1 |
| 2 |
| 3 |

内容の理解

□「京に歌合ありけるに、」（二〇・一）とあるが、次の項目のうちから、「歌合」に関するものを、四つ選べ。

- ア 撰者    イ 判者    ウ 紅白    エ 枕詞    オ 持<sup>じ</sup>  
 カ 序詞    キ 左右    ク 発句    ケ 判詞    コ 本歌取り

「    「    「    「    「    「    「    「    「    「    「

□「丹後へつかはしける人は参りにたりや。」（二〇・三）について、次の問いに答えよ。

1 「丹後へつかはしける」とあるが、何のために丹後へ使いをやったというのか。その目的を三十文字以内で説明せよ。

／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／  
 ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／  
 「    「    「    「    「    「    「    「    「    「

2 また、丹後へ使いをやったのは、(A) 事実であった、(B) 事実ではなかった、のいずれかを記号で答え、その根拠にあたる部分を本文中から十字以内で抜き出せ（句読点は含まない）。

記号「    」    根拠「    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／    ／

3 「参りにたりや」とあるが、どのような意味か。適当なものを次から選べ。

- ア もう出かけましたか    イ もう向こうに着きましたか  
 ウ もう帰って来ましたか

「    「

□「大江山」（二〇・六）の歌について、次の問いに答えよ。

1 「いくの」「ふみ」は、それぞれ何と何との掛詞になっているか答えよ。

「    と    「    「    と    「

2 「ふみ」は、どの言葉の縁語として用いられているか。該当する言葉を歌の中から抜き出せ。

〔四〕「返しにも及ばず、袖をひきはなちて逃げられにけり。」(一〇・八)について、次の問いに答えよ。

1 定頼がそうしたのはなぜか。三十字以内で説明せよ。

ア	悔り	イ	疑念	ウ	嫉妬
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／

2 この定頼の行動は、心の中に小式部内侍に対するどのような気持ちがあったと読み取れるか。適当なものを次から選べ。

ア 悔り    イ 疑念    ウ 嫉妬

〔 〕

〔五〕「歌よみの世おぼえ出で来にけり。」(一〇・九)とは、どういう意味か。適当なものを次から選べ。

ア 歌人として世の名歌を学び、信頼されることになった。

イ 歌人としてその名を世の中に知られるようになった。

ウ 歌人としてすぐれた歌のよみ方をようやくわかるようになった。

〔 〕

〔六〕本文中に、小式部内侍が女房としては珍しく強気な態度を見せたところがある。その部分を、二十字以内で抜き出せ(句読点を含む)。

ア	／	／	／	／	／	／	／	／	／
イ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
ウ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
エ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
オ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
カ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
キ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
ク	／	／	／	／	／	／	／	／	／
ケ	／	／	／	／	／	／	／	／	／
コ	／	／	／	／	／	／	／	／	／

〔七〕この話の眼目は、小式部内侍のどのような点にあるか。適当なものを次から選べ。

ア 当意即妙の機知    イ 歌道に対する執心

ウ 諧謔に潜む鋭い諷刺

〔 〕

【語句・文法】

- 1 下る「都から地方に下る。」  
2 局「女房の私室。」 3 直衣「貴族の平服。」  
4 あさまし「驚いたことだ。あきれたことだ。」  
5 返し「返歌。返事。」  
6 世おぼえ「世の中の評判。世間から思われること。」

【補足説明】

● 王朝男性貴族の服装

男子の正装を「束帯そくたい」といい、「昼ひ(日)の装束」という。冠・袍ほろ・表袴うすのはかま・表袴しやく・沓くつなどで装う。正装に対して、平服(私服)が「直衣」である。普通は烏帽子えぼしをつけ、指貫さしぬきを履く。また、旅行などの実用衣として「狩衣かりぎぬ」がある。

- 1 歌合ありけるに、「キ(ラ行変格活用)・ケ(連用形)」  
2 丹後へつかはしける人は「オ(四段活用)・ケ(連用形)」  
3 過ぎられけるを、「イ(上二段活用)・ク(未然形)」  
4 なかば出でて、「エ(下二段活用)・ケ(連用形)」  
5 まだふみもみず「ア(上一段活用)・ク(未然形)」  
6 世おぼえ出で来にけり。「カ(カ行変格活用)・ケ(連用形)」

□ 1 歌よみにとられて「ア(受身)」

- 2 局の前を過ぎられけるを、「イ(尊敬)」  
3 ひきはなちて逃げられにけり。「イ(尊敬)」

【補足説明】

1 は「選ばれて」の意味を読み取り、受身と判断する。2・3の主語は中納言定頼であるから、尊敬と判断する。

【要点の整理】

第一段落(起) 初め〜一〇・二

小式部内侍歌合に選ばれる

和泉式部が保昌の「妻」として「イ(丹後)」に下ったときに、京で「歌合」があったが、娘の小式部内侍が、「歌合」によみ手として選ばれてよむことになった。

第二段落(承) 一〇・二〜一〇・四

定頼のからかい

定頼の中納言が、からかつてオ「小式部内侍」に、「カ」[丹後]へおやりになったキ「使い（使者・人）」は戻って参りましたか。」と、ク「御簾（すだれ・局）」の中へ声をかけて、ケ「前（局の前）」を通り過ぎなさった。

第三段落（転） 一〇・４～一〇・７

あつと言わせた小式部内侍の返歌

すると、小式部内侍は、コ「御簾（すだれ）」から半分身を乗り出して、定頼のサ「直衣」の袖をとらえて、「大江山」の歌をよみかけ、「シ」[母（親）]のいる丹後は遠いので、まだス「便り（手紙・文）」も「ございせん。」と答えた。

第四段落（結） 一〇・７～一〇・８

定頼の狼狽

思いがけないことで、セ「返歌」をすることもできず、定頼は、ツ「袖」をふりきって逃げた。

第五段落（添加） 一〇・８～終わり

後日談

これ以後、小式部内侍のタ「歌人（歌よみ）」としての世のチ「評判」が立ったようだ。

【要点】

- ・ 本文は全一段となっているが、起（発端）・承（展開）・転（最高潮）・結（結末）・添加（後日談）の五段落に分けて、大筋を読み取る。
- ・ 説話のおもしろさは、意外な展開にある。その意外さに転じた第三段落に注目すると、起・承・転・結の構成として考えることができる。
- ・ 第五段落は、添加された話で、後日談として、本文の主題「小式部内侍の歌才」を世評の形で補足している。

内容の理解

【正解】

一 イ・オ・キ・ケ

二 1 歌合で発表する歌を、母の和泉式部に代作してもらうため。（二十七字）

2 記号Ⅱ（B） 根拠Ⅱまだふみもみず天橋立（十字） 3 ウ

三 1 行く（と） 生野・踏み（と） 文 2 橋

四 1 これほどの歌を即座によみ出すとは予期していなかったから。（二十八字） 2 ア

五

六 御簾よりなかば出でて、直衣の袖をひかへて（二十字）

七ア

【読解のポイント】

一 歌合は、競技者を左右に分け、決められた歌題で優劣を争い、判者が優位の結果を判詞に記す文学的遊戯。優劣の判定を決めかねた場合は、引き分け「持」とする。

二 1母が著名な歌人と泉式部であることに着眼する。小式部内侍が困って母に助けを求め、そのためと読む。

2 「まだふみもみず天橋立」とあるから、(B)と判断する。

3 母に助けを求めたと言ってからかっているので、使いが帰って来ないと意味がない。

三 1丹後へは、大江山を越えて行き、生野を通って行く<sup>と</sup>読み、天橋立を踏んだ(行った)こともないし、天橋立(丹後)にいる母からの文も見たことがないと読む。

2 「踏み・渡る・途絶ゆ<sup>と</sup>」はしばしば「橋」の縁語として用いられる。

四 1 「思はずにあさましくて」に着眼する。予想外でことの意外さに驚きあきれている。小式部内侍が、掛詞・縁語を用い、地名・状況をうまく織り込んで、即座に歌で返事をしたことに驚いたのである。

2 即座により出すと予期していなかったということは、小式部内侍の歌才を見くぶり、悔っていたのである。

五 「おぼえ」は動詞「おぼゆ」の連用形が名詞に転成した語で、目上の人から思われると「寵愛」となり、世の人から思われると「評判」の意となる。

六 当時の若い女性が、御簾から半身を出して男の袖をつかまえるのは、異例のことである。

七 定頼のからかいに即座に見事な歌で返している。